

夫れ人間の地を離るゝこと
五百隻膳那にして 無仏世界
黄泉国の中央に当り 閻魔王
宮の一構へ 余宝の慶門四畔
に開き 庭上籠中赫灼と 眩
くもまた物凄し 程なく獄

司の声として

獄司「ヤア／＼冥官俱生の面面 今参の奴輩を 亡者溜りへ 繰り込
み召されい」 獄吏「ハ、ア」

心得たりと立ち出て 衆
生を警護し鉄の
廻廊土辺へ突き据えられ 怖
さ見たさに伸び上り

遙の方をさし覗けば 業の科
や浄玻璃の 鏡を左右に立て
並べ 白杵黒繩持ち運ぶ
牛頭馬頭異形の眷属が 姿見
るさへ齒の根も合はず 身の
毛もよ立つ斗りなり 〽 身の

落ち着きは知らねども 後退
さりする人情を 棄てゝ怯ま
ぬ我慢の肘

長庵「これ〱押すな〱 経帷子が皺になるわえ」 落語家「サ
ア込み合ひますから 御勘弁なされまし」 長庵「オイ〱前の禿
頭 さう伸び上つては後の者が見えぬ 低う居をれ」

〽 と声に権兵衛振り向いて

権兵衛「ヤアおのれは足力按摩の長庵だな」 長「オ、お前は金貸
の権兵衛さん へ、へ、へ、何時もお達者で」 権「喧しいわえ イ

中貴様のやうな太元者を見たことがない」長「叱々場所が悪うござります 太いのなんのと此処で云つては」権「エ、金を貸して催促をするに 地獄でも極楽でも遠慮があらうか 廿、たつた今元利揃へて 長「もし〱〱〱 御尤もだが御覧の通り経帷子一点 それに引かへ定めてお前は 死ぬ時に有り金は爲替に振つて」権「何のつき 今の若さに死なうとは思わぬ故 六道銭の外一朱も持つては来ぬ」長「へ、嘘々」権「エ、地獄で嘘をつくものかえ」長「ハ、アそれで思い当たつた 人の噂にお前の溜めた有金は かみさんが残らず取り集めて」権「己が菩提を弔うて居やうな」長「何の〱 此方様が病氣の中から あの手代の珍八とねんごろして 今では夫婦になり その睦まじき仲のよさ」権「エ、そりやはんまの事か いやい〱」長「嘘と思ふなら来年の盆に」権「エ、それまで待つて居られるものか ヤイ〱女房 聞えぬ やい〱 勿論己れは呑いから 食はせるものや着るものは不自由させたが

コレ 爲べきことは爲てやつたに よくも不義を働いたな 子エ、おのれはなア」長「オ、痛夕、胸ぐらを捕らへて咽喉が オホン〱」権「是やモウ一寸 嬰嬰へ立歸りに行つて来ねばならぬ サ長庵急に路銀が入る 半金で負けるからよこせ」長「イヤサわしこそだしぬけに殺されたから 六道銭も持たぬと言ふに」権「イヤ何でも」〱と掴み付く

〱 目のない天物の強欲に 流
石の長庵持てあぐむを 見兼
ねてお園は割つて入り

お園「マア〱お待ちなされまし」長「ヤア汝や妹 己は兄を」

お園「待たしやんせ 其の言訳も」 六三「ハテ何事も斯うならぬ
先の事」 長「さては六三も一緒に失せたな」

と喧嘩に枝葉声高に 我を
忘れて立ちかゝれば

冥官「黙り居らう 此処を何処と思ふ 三千世界の其内に 引こ抜
の怖い所で喧嘩を致すは 王法仏法軽しむる大罪人 一々みじめを
見せて呉れん 疾く／＼御前へ罷り出で居らう」と引立てられ

四人を先に神子山伏 飛ん
だ相伴搦摸盗人 善悪邪正の

別け隔て 泣く／＼ 白洲へ

冥官「下に居らう」 亡者共「へ」

畏まる

冥「医者を始め夫婦の奴原 並々の罪人ならず 御詮議に暇が入ら
う それより先に 後に躡まって居る亡者 それに出居らう」 落
語家「へいはいエ、私は」 冥「娑婆の渡世は」 落語「へい落語
家で御座ります」 冥「フム氈鹿と申すは 角のない鹿のことか」
落語「いえ／＼ 役者物真似落し語 端唄新内何によらず遣らかし
まする者でござります」 鬼「ハテ稀代な獣物もあるものだ 何な
りとやらかせ／＼」 落語「畏りましてござります 私も御当所へ
は初て死んで参りました故 何ぞ御意に叶ひまするやうな音曲の入

りました新作を お耳に触れませうと存しますれど 当時は落し話
も言めかしい事のみで お慰みに相成りませぬ そこで何でも眼前
にあつたことを其儘に申し上げたら 少しはお笑ひにもなりませう
か 先づ新らしい事なら 此中御当所へ下りまして 今極樂の芝居
で勤め居ります八代目と大和屋の太夫の 浦里時次郎のお物語でござ
ります」 冥「何新内節か 是や面白からう」 落語「エ、御業
内の通り 時次郎もまだ三升さんになるやならず 色々団十な事が
重りました故 相方の浦里も今更坂東しうか心中しうかと 苦勞を
致して居るうちに 時次郎は一足先へ駆け出しました故 浦里はび
つくり致して もし時さんお前と云ふものは聞えぬものだ 女房に
成田屋と思ふ女は 世間に大和々々ある中にも 他に亭主は持つま
いと思つて居る私を置いて 上方へ行くのみか独り死ぬと云ふがあ
るものかど袖にしがみ付きます故 時次郎も漸う涙を払ひまして
エへん

「そなたも共にと云ひたいが
いとそなたを手に掛けて
何うなるものぞ存命へて 我
が亡き後で一遍の 回向を頼
むさらばやと 云棄て立つを
取付いて 余りむごい情無や

落語「とこれ迄でござります」 鬼「ヤイ／＼これからが明烏の肝
腎だ 後を遣れ／＼」 落語「いえ私のは明烏ではござりませぬ」
冥「さうして今のは」 落語「新内の後遣らずでござります」 鬼
「エ、何を馬鹿な」 五官王「オ、吟味は相済んだ サア藪医者お
のれは見る／＼から太々しい奴 身が手をおろして詮議する ヤア
／＼獄卒 責道具の用意々々」

〽と呼ばらる折柄 玉簾間近

く大五の 微妙の御声高やか

に

閻魔王「ア、ラ軽々し五官王 勘録舎を預りながら手づから呵責は

粗忽のいたり」と

〽綸言と共に聞ゆる音楽の

心耳を澄まし巻よぐる 錦の

扉帳警蹕は 出御とこそは知

られけり 罪人に御目も懸け

ず大五四方を打ち眺め

閻魔「霞に籠る残雪の山梅は匂ふ泥梨の底 ハテ風情ある景色ぢや

〽と御機嫌斜ならざれば 五 官五御前に進み

五「ハツ某手づから罪人を呵責なすをお止めありつれど 娑婆の罪人 仏法に帰依なし 近年地獄衰微に及び 倭約のお触れ出しあるに依つて 獄卒の人歩も減少なれば 趣無く手を下ろして」 閻魔「ホ、ウ貴公の心底神妙ながら 諸卒の減少は仏意に叶はず 只慎しむべきは十悪の内 口より作る四つの罪 それ故地獄の口は 兎角兩儀に通じ 詞敷の陰約が第一 娑婆にても地獄の詞は地口と称へ 専ら流行と聞き及ぶ 一言つて両方へ聞えるやうに 方々その旨心得てよからう」 五「其の儀は疾くより承知の候 それ大王の御退屈お茶箱でも

差上げい」 鬼「ハツバア」

〽と簡略地口牛頭馬頭の返 事も無駄はカア カ、カ、カ、カ、カ、カ、ナかりけ る長庵始終を聞きすまし

長「へエ然ては御当所も御倭約でござりますか それならば私をお抱へ下さりますせ 倭約は元より針も按摩も大名人 ちよつと揉ませて御覽しければ 明白にわかります

〽 明白と俟約と針と按摩で
よう／＼と生命繋いでたまは
れと 地口一つ懸かれは

閻魔「ヤアその地口 古い／＼己れよ一程の悪党と見ゆる 陳じ立て
せず白状致せ

〽 喝一つと御口開き給へど 長
庵怯む気色もなく

長「サ、／＼、／＼、その土茯苓は御本番なれど 大黃様の前で桂枝で
陳皮は致しませぬ」 五「ヤイ／＼薬尽くしの言訳 我が大君にわか
らうと思ふかい」長「サ、地獄御尤でござりますが かう見えまして
も私はさる諸候方のお匙でござります」 閻魔「こいつ両舌を使ふ
奴 只今按摩は上手だと申して うぬ按摩にお匙があるものか」 長
「エ、達磨にお足といふ地口かな」 五「黙れ按摩 イヤ針とは療治
なびい／＼亡者 それ青鬼秤にかけい」 青鬼「ハア」

〽 はつと眷属長庵の 襟髪取
つて秤の皿

五道転輪天秤を ためつすが めつ打眺め

青鬼「ハテ心得ぬ 面に似合はぬ軽い罪 何とも以つて合点がゆかぬ
〜と訝るこなたに赤鬼が 赤鬼「オ、軽い筈／＼ あちらの片足土べ
たへ踏張つて居ります」 五「イヤ秤目ぬすむ横着者 己れ俗性盗賊
ならん」 鬼共「俗名名乗れ」 長「へエ私の名は長庵」 五「さてこ
そ態坂」 長「ア、もしそれは長範 わたしは長庵」 五「ヤア範で
も庵でも用捨すな」と

〜下知の内より駆出づる 年

増亡者の梓神子 オ、長庵様
逢ひたかつた／＼と取縫れ
ば 情用捨もあられなく 女を

引退け五官五

五「ヤア長庵が罪を犯すに邪魔ひろぐ女 汝は何者」 神子「ハイ私
やいち子で」 五「その又いち子が何故あつて」 神子「サア此医者
殿が前方私等の在所へ参りました時 亭主にならうの何のかのとい
やがるわたしを身持にして 果は着類を持逃げノウ致し」 長「ヤイ
／＼ 夢にも知らぬ事を そして己れの様ないち子の亭主に誰がなる

ものか工」神子「イエ／＼見違えてよかんべ工か」長「イヤ知らぬ／＼」五「兩人共控へ居らうシテそちが亭主になつた証拠があるか」神子「アイ御座りますとも然も其の頃唄にまでうたはれ浮名の立つた仲だアもし」五「シテその唄は」神子「アイ」

〽長庵の目論見で いち子の
亭主になるべ工と それから
神樂の笛吹いたアリヤトコセ

五「もうよいわさ それ程の証拠があつても」長「イエこんな奴を孕ませた覚えはござりませぬ」神子「何無いえ是イナア」

〽長庵さん 年もゆかいで 恥
かしい 笛吹如来の御十夜に
おどけ云うたが深草の 少将
ばかり九十九里 上総本綿の
丈の無い お前と知らず打ち
廻んで 白立浪の底までも 何

の厭ひは荒磯に 夜の目鮑の
片思ひ 離れぬ仲と思うたに
ようもよう欺さんしたが
エ、憎らしい 捨てゝ行くと
はあんまりな わしや口情し
いと取付けば取つて突きつけ

長「大王様の前では御座りませぬぞ われを欺した覚は無いぞ」
五「ヤア飽くまで陳ずる横着者 うぬ骨をひしいて」 冥「アイヤ待
たれよ五官王 彼に白状さす手段あり 某きつと思ひついた ナニお
園とやら 其の方長庵が妹とあれば 是なる巫女に水むけいたせ」 お
園「あの私が」 冥「サ、両親を心に念しはや疾く」

と鋭き言葉に是非無くも
櫛爪切り唱名なし 梓の弓に
手向ければ 忽ち神子は面色
変り 五体を顛はし茫然と

声も殊勝に

ハハ一寄り来るわ 〱 〱 番変

礼品かはれ 鈿子の水も変は

り来る 我こそからの鏡ぞよ

へらどりは微塵も無くて 鳥

帽子宝は御身一人 相の枕に

別れて末は 別らの人に預け

る内 御身の臍の緒手繰り上

げ 我を非業に果させて へら

どりと偽りしぞ 名残は尽き

し是までよ 弥陀の浄土へ然

アらば工

六「エ、これお園 今神子の梓に懸かり寄に立ちしは其人の母親」お園「そんなら からの鏡と云ふは」六「おいノ 其の母御前の言はる、には へらどりの男の子は一人も無く 烏帽子室の子と言ふは其方一人 相の枕の父親が過行かれた後 里に預けて育てる内 此の長庵が 母を殺し 所持せし其方の臍の緒書を奪ひ それを証拠に兄と偽はり 年月せたげて金を負る大罪人」お園「スリヤ真実の兄さんと云うたは偽りでござんしたか」長「ア、これ 巫女の云ふ事が何で当になるものかエ」五「達つて争ふ上からは それ鏡に写して」鬼「ハッ」

心得丹色皮色の 鬼は手取りに引掴み 片意地張を浄玻璃

璃の鏡の面に

長「ハッ」 鬼「ヤイ息を吹つ懸けるな」

突き据ゆれば 不思議や光
明輝き渡り 前世の罪障悪業
の微塵も違はず現はれたり

六「オ、あれ 映るわ 所は正しく浅草の 然も三社の宵祭 此の悪者の長庵と七浪助がうなづき合ひ」お園「本にお前の落度となりし 小倉の色紙を取り出し」六「オ、石橋の曳き物に飾る牡丹の花房へ 押込み隠す悪事の段々」

あり／＼映る鏡の照 長庵
は心も空

長庵「ヤイ七郎助の大べら坊め 其処へ隠すといふ事が有るものか
此処へ遣せ

と手を伸ばせば たはけ面
めとはり退くる

六「スリヤ色紙の盗賊もおのれが巧であつたよな」 閻魔「ホ、凡
俗何ぞ覺らんや 六三郎が主人より預りの宝失ひし元お園を手に入
れんと七郎助が企みに乗り 偽り謀る長庵が無量の悪逆 まつたお園

が母を殺せし当の敵を因らず討ちしも信心の御徳 ホ、歡喜々々

と嘆息ましまし 大五賞美
の御言宣り 長庵なほも首振
り立て

長「イヤ／＼／＼然うはならないの閻魔様例へ兄で無いにもしろ
人を殺した者を赦すと云ふは依怙顛頂だ それで閻魔の正道が立ち
ますかえ」 閻魔「それ鉄札を持たせ詮議中熱鉄地獄へ打込み置け」

と聞くより権兵衛 しや／＼り出て 権「コレ長庵その熱鉄地獄と
やらへ行つたら お主の体が焦げてしまうだらうして見るとおれが
貸しが無茶になる せめて利分ばかりでも」 五「ヤア大罪は長庵は

かりか己れも是まで高利を取り 人を苦しませし科輕からず 等活地獄へ打ち込むのだわ」 権「エ、そんなら私はアノ等活地獄で」

熱鉄あつ馬 三月雛様 四月 がお釈迦で 五月がお幟

閻魔「黙り居らう 地獄開闢此方の重罪人 それに引替へお園六三が善根功德 その正直の心を感じ人殺しの罪を赦し 金札子へて速かに寂光浄土に引率致」 六「スリヤ我々を」 兩人「エ、忝い」 権「あゝもし、長庵はともあれ この権兵衛もお序に」 冥「ヤア虫の好い奴 それ兩人をどやしつけい」 長「コシ、大五様がどやせとも仰らぬに」 冥「イ、ヤ大五様はどやすがお好きだ」

大五様はどやすがお好く
いとどやせぐいと
どやせりし泣くよと拍
子に懸かつて矢鱈打ちア痛
夕、、、追つ立て、こそ
才痛たつた突つ立つたお

才、

閻魔「然らば」 六「おぢらば」

善悪邪正の両道へ別れ

て行く先は